生活領域の多様化と適応

文・浦　光博
Ura, Mitsuhiro

要約

生活領域の多様化が進む現代社会において、人びとが健康に過ごすことができる対人的環境とはどのようなものかについて、企業に勤める二〇三名の男性を対象とした調査研究を行った。

各調査対象者が、職場における重要他者と職場以外の生活領域での重要他者それぞれとどのような対人関係を形成しているのかを調べ、それら対人関係の特質と身体症状への評価との関連性が、職場と家庭での役割への意識のあり方によってどう異なるかを分析した。

結果は以下のことを示していた。「男は仕事、女は家庭」という伝統的な性役割観を持つ男性は、職場での対人関係上の葛藤を職場以外の生活領域に持ち込みやすく、また、職場での対人関係の特質が健康に反映しやすかった。逆に、「男も女も、仕事も家庭も」という平等主義的な性役割観を持つ男性は、職場と職場以外の生活領域を相互に独立したものとみなしており、また職場以外での対人関係の特質が健康に反映しやすかった。

複数成員性と健康

ほとんどすべての人間は、複数成員性を持っている。職場組織、家庭、友人集団、近隣、地域社会等に同時に所属し、種々の対人関係の中で生活している。とりわけわが国においては、従来の企業中心主義的な社会のあり方への見直しが叫ばれ、働く人びとの家庭や地域社会への回帰が求められている。

このような社会の変化のなかで、複数の生活領域間のインターフェイスのあり方と人びとの適応過程の関連を検討することは、人びとが健康にそして幸福に暮らしてゆくための条件を探る上で、大きな意味を持つ。

ここでは、職場での対人関係と職場以外の生活領域での対人関係とが働く人びとの健康といかに関連するのかについて、企業に勤める二〇三名の男性を対象とした調査の結果を報告したい。

対人関係の質

職場における重要他者との対人関係と、職場以外での重要他者との対人関係のそれぞれが、いかなる特質を持つかを測定するために、QRI（quality of relationship inventory）翻訳版を用いた。これは、ある人にとっての個別的な対人関係の肯定的な特質と否定的な特質のそれぞれを定量化するための尺度である。

対人関係の肯定的特質とは、ある対人関係がどれほどサポーティブなものであるかの程度を意味し、対人関係の否定的特質とは、ある対人関係がどれほど葛藤を含むものかの程度を意味する。従来の研究から、対人関係のこれら両側面は一次元上の両端にあるものではなく、相互に独立した次元を構成することが確認されている。

身体症状の指標

人の適応の指標としては、身体症状についての認知的評価を指標とするため、GHQ（general health questionnaire）の短縮版二十八項目の中から、身体的ならびに行動的な症状について述べられた二十一項目を用いた。一般にGHQ短縮版は抑うつについて測定するための七十二項目も含んでいるが、今回の調査ではこれらの項目は削除した。

二十一項目の得点の合計点が高いほど、身体症状が悪化していると評価していることを示す。

平等主義的性役割態度

本研究のもう一つの重要な変数が、平等主義的性役割態度である。これは、いわゆる「男は仕事、女は家庭」という伝統的な性役割観に対するものとして「男も女もともに仕事も家庭も」という性役割観を想定し、これへの賛成・反対の程度を示すものである。

この態度を測定するための尺度（SESRA－S）は十五項目からなり、一次元の合計得点として指標化される。得点が高いほど平等主義的な性役割態度を強く持つことを意味する。

結果と考察

得られた結果のうち興味深いものを、表1ならびに図1と図2に示した。表1から、平等主義的な性役割観を持つ男性（SASRA－S得点の上位三〇％以内に入る者）は、職場での対人関係と職場以外での対人関係を相互に独立したものであると認知しており、逆に伝統的な性役割観を強く持つ男性（SESRA－S得点の下位三〇％以内に入る者）はこれらを相互に独立のものとは認知していないことがわかる。

この相関についての構造方程式分析の結果によると、職場での葛藤が職場以外での葛藤に影響するという因果関係が想定できることがわかった。

表1　平等主義的性役割態度の低群と高群における人間関係領域間インターフェイス

		職場以外での対人関係	
		サポート	葛藤
職場での対人関係	SESRA-S低群		
	サポート	0.15289	0.11366
	葛藤	-0.01446	0.47354**
	SESRA-S高群		
	サポート	0.15069	0.13318
	葛藤	0.11061	0.14744

** p<.01

また、図1と図2より、平等主義的性役割態度を持つ男性は、職場以外での対人関係がサポーティブなものであれば健康を保つことができるのに対して、それが葛藤を含むものであれば健康状態が悪化することがわかる。一方、伝統的な性役割態度を強く持つ男性は、職場での関係がサポーティブなものであるほど身体症状が緩和されることがわかる。

以上の結果から次のことが示唆される。まず、「男は仕事、女は家庭」という伝統的な性役割観を強く持つ男性は、職場での葛藤を職場以外の生活領域にまで持ち込みやすい。また、そのような男性は職場の対人関係が良好なものであれば、身体的健康を維持できるが、職場以外の対人関係は健康とは無関連である。逆に、「男も女も、仕事も家庭も」という平等主義的な性役割観を強く持つ男性は、職場と職場以外の生活領域をそれぞれ別のものとして区別している。そして、職場以外での対人関係が健康を左右する。

最初に述べたような社会の変化によって、人は職場では無駄を省いた効率的な労働によって高い生産性を求め、そこを一歩出ると、心身のやすらぎと個人としての生活の充実を求めるというような、生活領域間の機能的な分化が進むものと予想される。そうであるとすれば、来たるべき社会の中で全体的な生活の質を向上させるためには、自らの役割について多元的な認識を持つことが必要だといえそうだ。

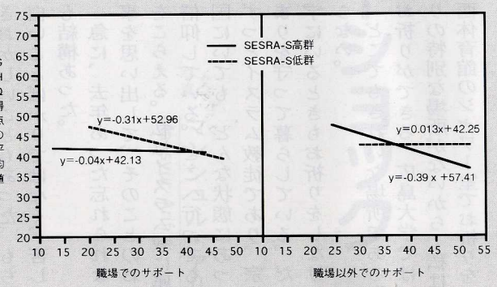

図1　職場と職場以外での対人関係におけるサポートの程度と身体症状との関連についての回帰直線

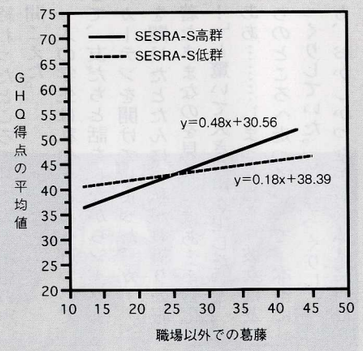

図2　職場以外での対人関係における葛藤と身体症状との関連についての回帰直線

プロフィール

◇一九五六年生まれ
◇関西大学大学院社会学研究科修了
◇博士（社会学）
◇総合科学部助教授
◇専門は社会心理学、グループ・ダイナミックス
◇現在の関心をひとことで表現すると以下のとおり。

社会の大きな変化の中で人の行動様式や生活がどう変ってゆくのか、また人の行動が社会をどう変えてゆくのか、そして集団や組織は人と社会をどう仲介するのかといったテーマを、対人関係の構造分析、機能分析を手段として検討すること。